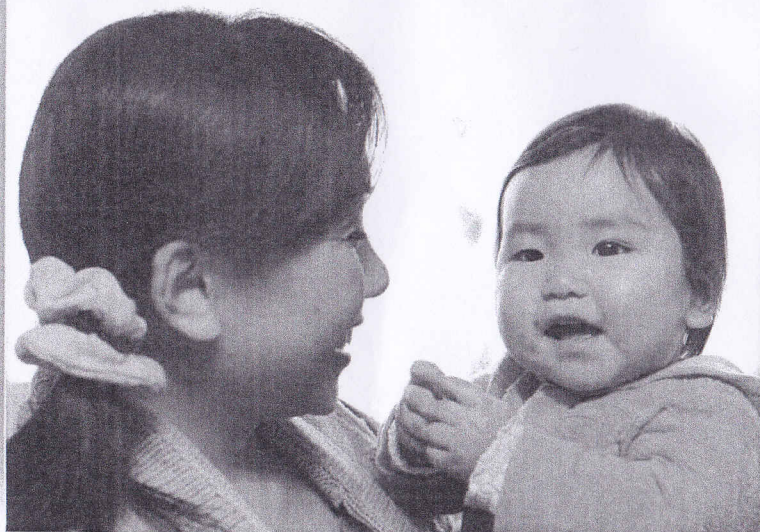


失い、涙し、そして希望



人々の脳裏に焼き付く「3・11」から1年がたつ。東北に襲い掛かった東日本大震災。多くのものを失った人々が、一日一日を懸命に生きてきた。苦しみを抱える人がいる。悲しみが癒えない人もいる。それでも、希望の芽は確かに膨らんでいる。心をつなぎ、命を育む営みが、被災地の明日を築く。



写真右(左)震災の日に生まれた橋本奈ちゃん。震災直後に抱っこされた、うれしそうに笑った。

写真右下 氣仙沼市の仮設商店街で披露された百沢舞踊に買い物も足を止めた。

写真左 地域の希望もつた「奇跡の本松」のそばで遊学どもたち。

産声

あの日、産声を上げた子が、義の誕生日を迎えた。福島市山町の子守屋藤本紀明さん(55)、幸枝さん(54)夫妻の次女(おひろちゃん)が、昨年1月11日震災発生直後の午後3時26分に生まれた。車の中だった。子守屋を、遠く離れた市内の病院にいたとき、地震に揺られた。避難を促され、駐車場の車に乗ったことで陣痛が激しくなった。

間もなく、車内で元気な産声が響いた。「ただただうれしかった」と産後3人は語り返す。家族の心配もつかの間、福島第一原発事故が起きた不安を抱えながら市内で暮らして続けた。周囲の心配をまにまげ、産後はすくすく成長した。

新生児に椅子を動かして組み組む市民体君の椅子プロジェクト(北海)と多く、岩手、宮城、福島、3県で震災当日104人の赤ちゃんが生まれた。

多くの人を悲しめた包み込み日授かた命「誰かだど心に渡る道」のちっぴん人になつてほしい。そう願って現在まで行けたお嬢を、両親は優しく見守る。

交流

プレムの仮設商店街に感謝のいいおはやしが響く。岩手県大田町の「沢野子踊(しおひり)」が4日、氣仙沼市南町で演じられた。

氣仙沼・天徳にも震災環境的な被害を受けた。交流の機会も、両地域で支援を続ける両山市のNPOが仕掛けた。

大田町からは別人が訪れ、復興を促して意見交換した。又ははわかれが大田町へ。氣仙沼復興商店街副理事長の坂本正人さん(54)は言う。

南町は、OOE以上が軒を連ねていた。津波で木造の店舗は流され、空っぽのコンクリートの物だけが残った。「このままでは倒壊してしまう」。震災の1ヵ月後、店主らは青森市を始め、12月には仮設商店街に約50店がオープンした。

他の被災地との交流は初めだった。支援がゆる中、情報を共有し、自立的な復興を目指す。これらが本気のスタート。商店街を立ち上げた男社長の、店主の心も立った。

一本松

すくすくと空に向かって伸びる。浜風に枝葉が揺れる。流石とた風の中、ただ一本の松がシルエットを描く。流石とた風の中、ただ一本の松がシルエットを描く。流石とた風の中、ただ一本の松がシルエットを描く。流石とた風の中、ただ一本の松がシルエットを描く。

残ったのは一本。樹幹にもまれながら大地をしっかりとつかんでいた。奇跡の一本松と呼ばれようになった。樹齢は60年を超える。海水に浸った樹干は腐食が一段進み、幹は腐々しい腐蝕が浅る。震災に耐えた松も、いずれは枯れる運命にある。

人々は再び動いた。地元の女性だけが震災に冷たい寒めていた松ほぐりから種取り、市民団体「田代松原を守る会」に託した。市民の研究機関は「一本松から取った種に播く必要はなく、苗の育成に挑んでいる。」

「100年かかっても、松原を取り戻そう。それが、勇気を入れた一本松の意思になる」。守る会のメンバーは復興を信じている。

